

「教育臨床総合研究 特別号」

1000時間体験学修追跡調査アンケート結果から得た成果と課題

Results and Problems of “Activities for Education Experience” with questionnaire survey

藤田 耕一*

Koichi FUJITA

村上 幸人*

Yukito MURAKAMI

長岡 美沙*

Misa NAGAOKA

寺井 由美*

Yumi TERAJ

光森 智哉*

Tomoya MISTUMORI

大谷 修司**

Shuji OHTANI

要 旨

平成16年度からスタートした島根大学教育学部の教員養成カリキュラムである「1000時間体験学修（基礎体験領域，学校教育体験領域，臨床・カウンセリング体験領域）」は，平成25年度で10年目を迎えた。

そこで，更なる1000時間体験学修の充実を図るため，卒業生の1000時間体験学修での学びが，就職後の仕事にどのように活かされているのかアンケート調査を実施することにより，今後の1000時間体験学修の在り方を考えていきたい。

〔キーワード〕 追跡調査アンケート，1000時間体験学修での学び，有用性，成果と課題

I はじめに

「1000時間体験学修」は，1000時間に及ぶ体験学修を卒業要件として必修化した教育課程あり，「基礎体験領域」「学校教育体験領域」「臨床・カウンセリング体験領域」の3つの体験領域から構成されている。

基礎体験領域とは，これからの教師に特に求められる社会性や豊かな人間性を育成する場であるととらえ，「子ども」「地域」「学校」の3つのフィールドに分類し，それぞれの場で様々な活動を通して，教師にとって必要な資質や能力が形成されていくと考えている。

また，学校教育体験領域とは，1年から4年まで段階的にステップアップしていく学校教育実習である。大学の講義で学んだ知識や理論と，附属学校園での授業参観，子どもとのふれ合い，授業実践といった体験が有機的に混ざり合うことによって，教師力を高めると考えている。

臨床・カウンセリング体験領域とは，学校現場で大きく取り上げられている，いじめや不登

* 島根大学教育学部附属教育支援センター

** 島根大学教育学部自然環境教育講座（附属教育支援センター兼任）

校また学級崩壊などの今日における教育的課題についての理解を深め、これらの課題に対応する上で必要となる臨床カウンセリングマインドを育てると考えている。

卒業生たちがこの三領域でどのようなことを学んだのか、また卒業後、学校をはじめとする様々な職場でその学びがどのように活かされているのか、アンケート調査することにより、1000時間体験学修の成果と課題を明確にしていきたい。

また就職後、大学在学中を振り返り、在学中に身につけておくべき資質や能力は何だと感じているのかを調査することにより、1000時間体験学修での今後の重点項目や改善点などが示されるのではないかと考えている。



II 調査の概要

1. 調査目的

この調査は、鳥根大学教育学部の教員養成カリキュラムである「1000時間体験学修」で卒業生が何を学び、現在その学びをどう活かしているのかを把握することを目的としたものである。

2. 調査の内容

調査内容としては、以下の4つを挙げ、概略とその考察を記載した。

- (1) 基礎体験活動で印象に残っている活動及び学びがあった基礎体験活動
- (2) 三領域における教育現場（就職先）での有用性
- (3) 大学のうちに身に付けておく資質・能力
- (4) 後輩へのメッセージ

3. 調査の対象及び方法

調査の対象は、1000時間体験学修を体験した平成19年度卒業生（平成16年度入学）から平成23年度卒業生（平成20年度入学）、合計848名である。

4. 調査の時期

調査は平成24年12月末に依頼し、平成25年3月末までに回収した。

5. 調査の回収状況

調査人数848名に対してアンケート調査の回収数が176名で、回収率は約21%であった。

尚、以下の調査結果は平成19年度卒業生（平成16年度入学）から平成23年度卒業生（平成20年度入学）、合計176名の回答者全員を母数とした。

Ⅲ 調査結果について

1. 基礎体験活動で印象に残っている活動及び基礎体験活動の学びについて

1000時間体験学修の中で、基礎体験活動（選択）の占める割合は4割で400時間の活動が必要となる。毎年、学校や社会教育施設をはじめ幅広い分野から多様な体験活動が募集され、学生は募集用紙等を見て、自分の興味がある活動や体験しておきたい活動等を選択し参加することになる。

卒業生が在学中に基礎体験活動で印象に残っている活動（図1）、また、基礎体験活動での学びの有無（図2）とその学びのあった活動（図3）について調査した。

問1 1000時間体験学修の基礎体験活動で印象に残っている活動は何ですか。また、その理由はなんですか。（複数選択 可）

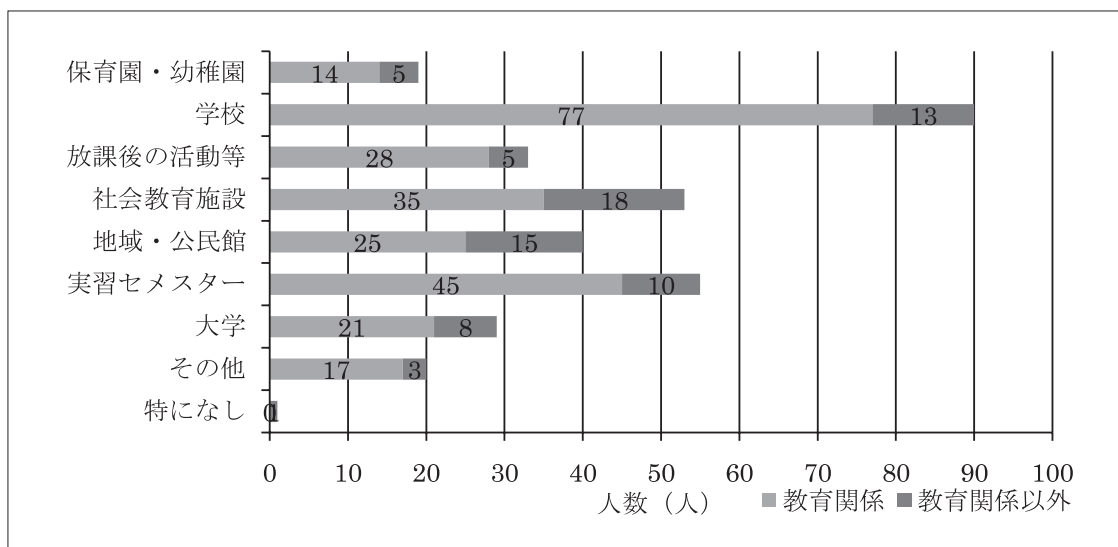


図1 基礎体験活動で印象に残っている活動

【問1の結果】

- ・基礎体験活動で印象に残っている活動の中で、学校での支援活動が印象に残っている卒業生が多かった。
- ・教育関係者以外の仕事に就いている卒業生については、社会教育施設や地域・公民館での活動が印象として上位を占めている。

【印象に残っている理由：回答者の一部を抜粋】

- ・授業に入らせていただき、個別指導を行ったり、土曜日の学習支援活動を行ったりして先生方や子どもたちと多くの関わりをもつことができたから。
- ・子育て支援センターの活動で、様々な子どもの遊びや親子の関わり合いを学んだことが、児童福祉の仕事に就きたいと思うきっかけになったから。
- ・地域イベントや公民館事業に参加をし、キャンプ等の体験が子どもたちと一緒にでき充実した時間が過ごせたから。
- ・実習semesterでは、小学校で1日活動することで子どもたちの様子や先生の仕事をよく見ることができたから。
- ・5泊6日の長期の社会教育施設の活動で、子どもと接し子どもの成長がよくわかる活動だったから。
- ・様々な体験を通して、教員にとってまた社会人として大切なものを得ることができたから。

- ・ 4年間地域のリーダー養成研修に参加し続け、子どもの見方や関わり方だけではなく、社会人としてのマナーも教えてもらうことができたから。
- ・ 特別支援教育専攻の者として、障がいがある子どもたちのお祭りを開催すべく、話し合ったり道具を作ったりしたのが特に思い出に残っているから。
- ・ 地域に出て美術関係の活動を行ったが、専門性を活かして地域の人々と関われたから。
- ・ たった2週間の実習セメスターだったが、本当に素晴らしい先生方や子どもたちに恵まれ、教員になるか迷っていた気持ちがしっかりともてた活動だったから。
- ・ 適応指導教室で、不登校の子どもと関わる中で子どもたちがもっている個性に感心したし、バスケットボールの指導では保護者とのつながりができたから。

【まとめ】

子どもたちや先生、また地域の方々等との素敵な出会いやふれ合いが、印象として強く残っているようである。また体験した活動がきっかけとなり、現在の職業に就いたという回答も見られ基礎体験活動が進路決定にも影響していることがうかがえる。

問2 1000時間体験学修の基礎体験活動での学びはありましたか。

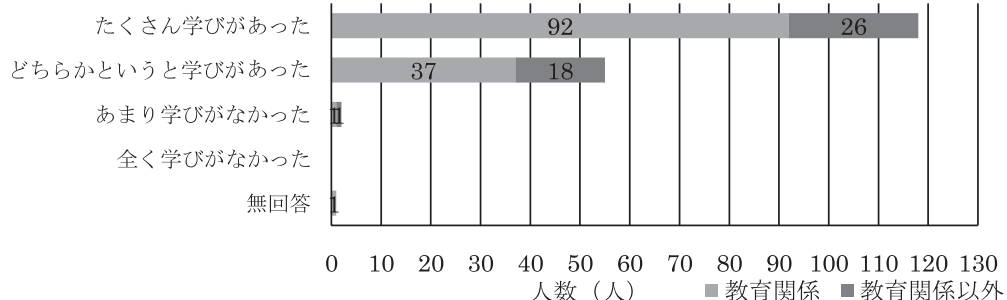


図2 基礎体験活動での学び

問3 基礎体験活動での学びがあった活動は何ですか。また、どのような学びがありましたか。(複数選択 可)

※問2で「たくさん学びがあった」「どちらかという学びがあった」と回答があった方のみ対象

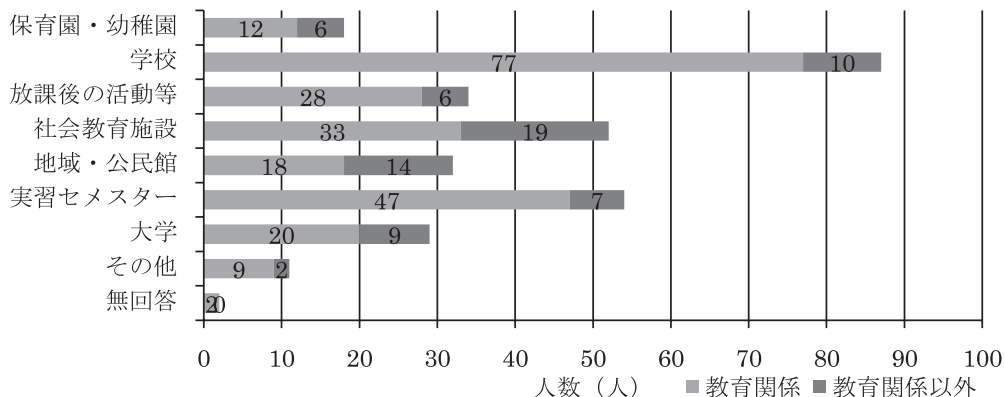


図3 基礎体験活動での学びがあった活動

【問2・問3の結果】

- ・問2の結果から1000時間体験学修の基礎体験活動での学びについては、ほとんどの卒業生が学びがあったと感じていることがわかる。
- ・問3の学びがあった活動については、問1との関連もあると思われるが、学校での支援活動、実習 Semester、社会教育施設での活動が上位になっているが、それ以外の活動についても学びを感じている卒業生が多い。

【どのような学び：回答者の一部を抜粋】

- ・学校での学習支援活動を通して、一人一人個性が違う子どもにそれぞれどういったアプローチの仕方が良いのか学んだ。
- ・地域の人や同期生と一緒に行事やイベントなどの企画（スタッフ）側を経験したことは、たくさんのお出会いもあったし、何事も様々な視点がもてるようになった。
- ・いろいろな生活環境で育っている児童生徒に出会い、自分の視野を広げようと思うきっかけとなった。
- ・いろいろな世代の方と接する機会があったので、その方々とのコミュニケーション能力がついたと思う。
- ・学校や幼稚園の1日の流れを大体把握することができた。また、年齢による特徴や学習でつまづきやすい所を知ることができた。
- ・専攻別体験では自分たちで企画・運営をする機会が多く、配慮すべきことや計画書を作る上で必要なことを学んだ。直接子どもたちと接する機会も多かったため、安全管理の大切さや子どもたちが楽しむためには、まず自分から雰囲気を作ることの大切さを学んだ。
- ・学習支援活動に参加をし、大学の講義だけでは実感を伴わなかった子どもの様子や支援の必要性を知ることができた。
- ・子どもと関わる中で、難しいと感じたことについて自分なりに考えたり、教員の方に助言をいただいたりしたこと。
- ・合唱団の活動では40代から70代の方々がおられ、幅広い年代の人と話す機会がもてコミュニケーション力・礼儀・マナーを学ぶことができた。
- ・学校教育以外の「社会教育」という教育があり、学校教育だけでは育むことが難しい主体的な学びを生み出す働きかけがあることや、企画・立案の方法等の手法を学ぶことができた。
- ・子どもだけではなく、保護者や教員といった大人の世代とのふれ合いもあり、就職時に役に立った。
- ・最初は、「やらなければ卒業できない」という気持ちが強かったが、そのような体験があったからこそ厳しい社会人の世界で何とか頑張れる。

【まとめ】

ほとんどの卒業生が基礎体験活動での学びを感じており、本活動が「社会性や豊かな人間性を育成する場」となっていることがうかがえる。また、活動先で指導していただいたことが、現在の仕事に活かされている記述もあり、様々な方のお力添えがあり本活動が成り立っていることがうかがえる。

問4 基礎体験活動での学びがなかった理由は何ですか。(複数選択可)

※問2で「あまり学びがなかった」「全く学びがなかった」と回答があった方のみ対象

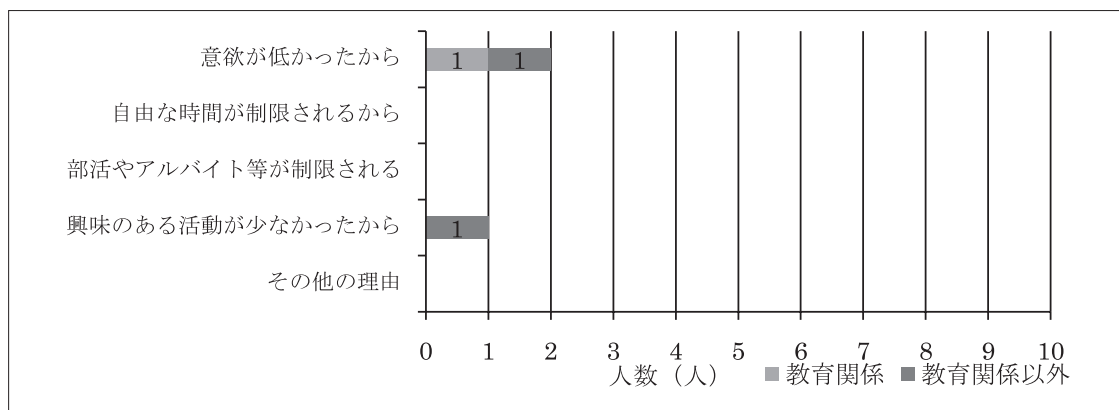


図4 基礎体験活動での学びがなかった理由

【問4の結果】

・問2で「あまり学びがなかった」「全く学びがなかった」との回答が3名あった。「意欲がなかったから」「興味のある活動がなかったから」が理由として挙げられた。

【まとめ】

全体の割合から言うと3名は低い数字だと思われるが、現在在学中の学生の中にも同じような意識の学生もいることが考えられる。基礎体験活動をすることによって将来どのようなことにつながっていくのかを基礎体験セミナーの中で伝えたり、新しい分野の基礎体験活動を開拓したりする必要性も感じた。

◆問1～問4の結果から、次のような特徴が挙げられる。

- ① 印象に残っている活動、学びがあった活動については、全体を見ると「学校での支援活動」「実習セメスター」「社会教育施設での活動」が上位を占めているが、参加経験が偏っていたことも少なからずあったと考える。教育関係以外の仕事に就いている方は、「社会教育での活動」「地域・公民館」を上位に挙げておられる方が多いのが特徴である。
- ② 基礎体験活動での学びについては、卒業生の約98%が学びがあったと感じている。学びの内容については、様々な方とのふれ合い、指導を受けたりすることにより、基礎体験活動で身につけてほしい「10の教師力（学校理解、学習者理解、教科基礎知識・技能、授業実践研究、リーダーシップ・協力、社会参加、コミュニケーション、探究力、教師像・倫理、リテラシー）」がある程度在学中に身につけていると考えられる。
- ③ 3名の卒業生が、基礎体験活動での学びをあまり感じていないという結果になった。在学中における基礎体験活動の意欲の向上を図る取り組みをしていかなければならないと考える。

2. 三領域における教育現場（就職先）での有用性について

豊かな体験活動と高度な教育的実践力を培うことを目的とした1000時間体験学修が、教育現場や就職先で役立っているのか、またどのようなことに活かされているのか調査することは重要である。ここでは、三領域それぞれの教育現場や就職先での有用性とその内容（図5～図9）について調査した。

（1）教育関係者対象

問5 1000時間体験学修の「基礎体験活動」は、学校現場で役立っていますか。

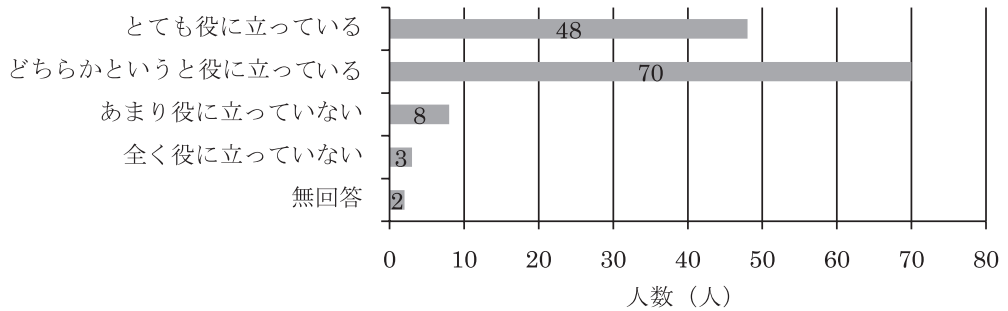


図5 基礎体験活動の有用性

問6 1000時間体験学修の「学校教育体験」は、学校現場で役立っていますか。

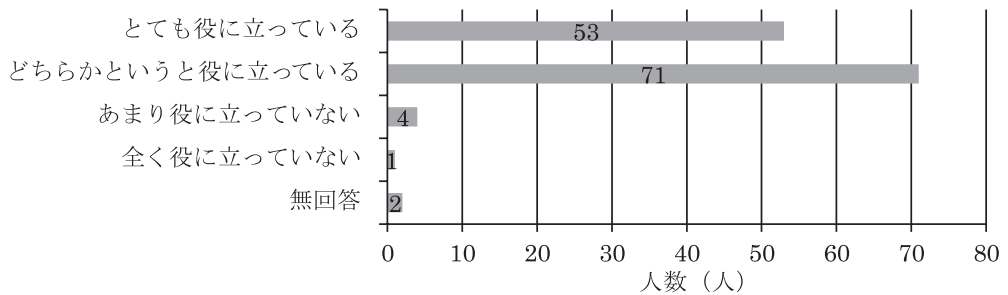


図6 学校教育体験の有用性

問7 1000時間体験学修の「臨床・カウンセリング体験」は、学校現場で役立っていますか。

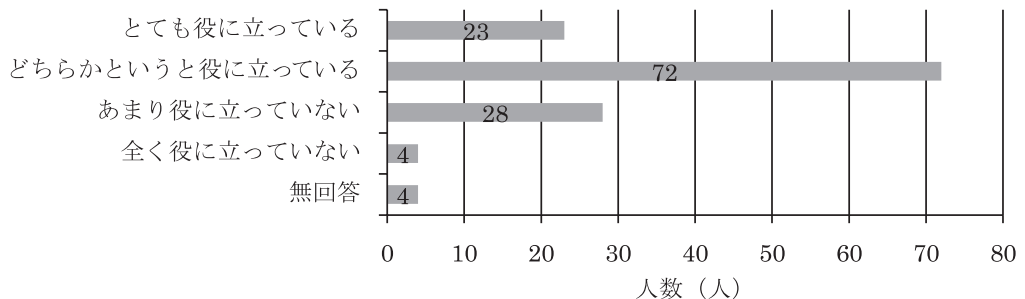


図7 臨床・カウンセリング体験の有用性

問8 1000時間体験学修は、学校現場のどのようなことで役立っていますか。また、役立っている具体的な内容についてお書きください。(複数選択 可)

※問5～問7まで「とても役立っている」「どちらかというと役立っている」に1つでも回答があった方のみ対象

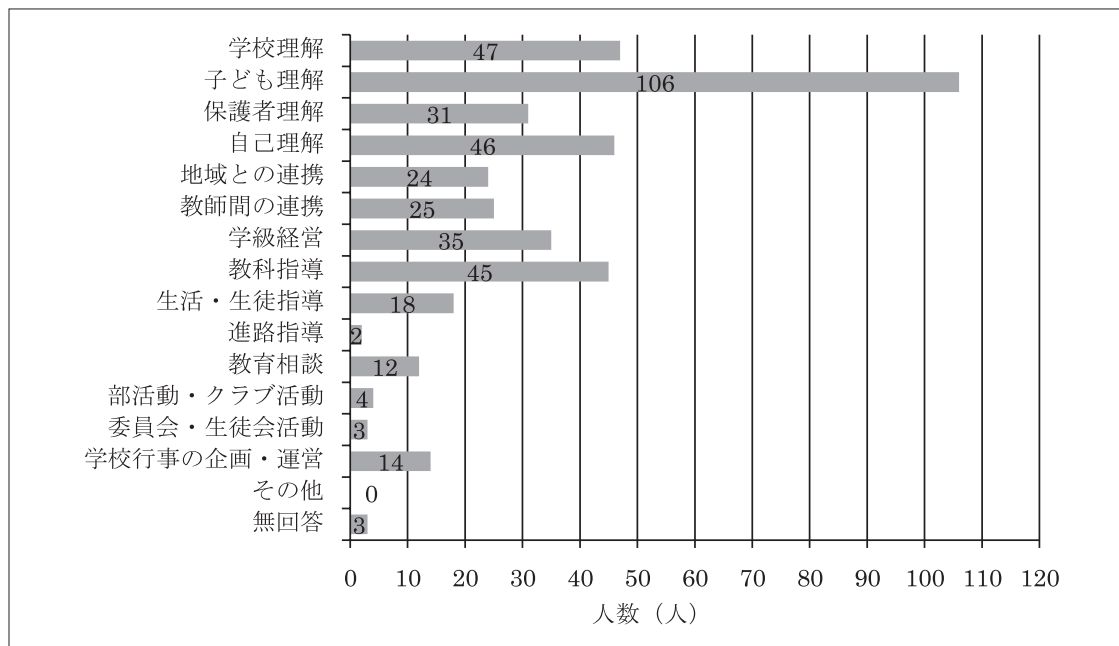


図8 有用性示した内容

【問5～問8の結果】

- ・問5の結果から「基礎体験活動」が学校現場で役立っていると感じている卒業生が約90%いる。
- ・問6の結果から「学校教育体験」が学校現場で役立っていると感じている卒業生が約95%いる。
- ・問7の結果から「臨床・カウンセリング体験」が学校現場で役立っていると感じている卒業生が約73%いる。
- ・問8の結果から「基礎体験活動」「学校教育体験」「臨床・カウンセリング体験」の三領域での学びが、学校現場での「子ども理解」に役立っているとの回答が最も多く、ほぼ同数だが「学校理解」「自己理解」「教科指導」の順となった。

【有用性を示した具体的な内容：回答者の一部を抜粋】

〔基礎体験について〕

- ・不登校の生徒を担任した際に、多様な個性の子どもたちと関わっていたことが自信になった。
- ・教員間でのコミュニケーション等。積極的に周りの先生方に相談することができている。
- ・障がいがある子どもたちと接する体験活動に参加していた。現在障がいがある子どもたちと

接しており、言葉がけやパニックの対応に役立っている。

- ・保護者とどのような姿勢で向き合えばよいのか、その関係づくりに役立っている。
- ・大学時代の学習支援の活動で、先生方の授業を見せていただき、学習支援の仕方や子どもへの接し方、授業の行い方などをまねさせてもらっている。
- ・様々な活動でいろいろな学校の先生を見てきたので、実際に現場に入った時に職員室の空気や人間関係に早く馴染むことができた。
- ・「子どもの前に立つことに慣れているね。」とたくさんの先生方に言ってもらった。また自分がどんなことを目指したいのか、考えをもって仕事ができている。
- ・幼稚園の教諭として働く上で、基礎知識をある程度もつことができた。
- ・全てにおいて学校教育活動の指導に役立っている。特に生徒理解という点において、生徒に対する接し方に役立っている。

[学校教育体験について]

- ・学校教育体験を通して、教材・教具の工夫が子どもの学びを深めることに気付いたので、日頃の授業でもそれを意識して実践することができている。
- ・幼稚園の教員をしているが、小学校での1か月間の実習の経験があり、他の先生より小学校が身近に感じられるとともに、幼稚園・小学校の連携等これからの教育に活かしていけるのではないかと思う。
- ・授業づくりや日頃の会話で、家庭環境に配慮することの大切さ。
- ・実習を経験したおかげで、授業に向けての教材研究、授業での指導、反省したことを活かして次に繋げることなどを考えられるようになったと思う。
- ・実習生同士・教授・小中の先生と授業協議を重ね、自分の指導法について検討していただいたのでアイデアや方法をたくさん得て今も活用している。
- ・指導案の書き方や授業の構成の仕方など、主に学習に関する場面において役立っている。
- ・現在は高校に勤務しているが、生徒が小中学生の頃を想像しつつ接することができる点で、小中学校の学校教育体験が役立った。
- ・たくさんの授業を見ることができたのが一番の宝だ。職場に入ると他の方の授業を見る機会が少ないので。
- ・実習中にかげられた先生からの言葉をたまに思い出すことがあり、自分の発奮材料になっている。

[臨床・カウンセリング体験について]

- ・エンカウンターなど学級の生徒の関係づくりを実践することができた。
- ・グループワーキングトレーニングの手法を実践でき、学級経営・生徒指導面でつながっている。
- ・エンカウンターは実際に体験したことで今でも覚えている。初任に就いた時、学級活動や道徳について授業づくりを考える時間がない中に、さっとできることをもてていたことは大きかった。
- ・C系G系などのグループ学習で、人との関わり方や保護者との関わり方を考えることができた。

- ・カウンセリングマインドをもつことの重要性や話を聴くということ。
- ・基礎的なことを体験したおかげで、子どもへの指導をするための素地が培われたのではないかと思う。
- ・教育相談もしくは学級内でのトラブル対応に役立っている。
- ・子どもを指導する上で、教員の思い以上に子どもの心理を優先して指導することが多いと感じる。体験の中で心理を捉えることが教育にも関与していることがよくわかった。
- ・カウンセリングマインドを身につけるまではいかないが、子どもの考え方を受け止めるという視点で、基礎知識が身に付けられてよかったと思う。
- ・不安定な精神状態にある生徒のカウンセリングにあたることが多いので、ロールプレイング等は大変役立っている。
- ・様々な学習したが、学校現場で役立つというよりは自己理解につながっているのかと思う。

【まとめ】

三領域を通して様々な子どもとの関わりや現場の教員の授業を見る機会、また臨床カウンセリングマインドを学ぶ場があるため、「子ども理解」「学校理解」「教科指導」が有用性の上位にきていると考えられる。有用性の上位にはこなかった他の項目についても、学校現場ではどれも重要なものであり、今後1000時間体験学修で学んだことが更に活かされることを期待したい。

問9 1000時間体験学修が、なぜ学校現場であまり役立っていない、全く役立っていないとお考えですか。その理由をよろしければお書きください。

※問5～問7までに1つでも「あまり役立っていない」「全く役立っていない」と回答があった方のみ対象

【結果】

- ・問5の結果から「基礎体験活動」が学校現場で役立っていないと感じている卒業生が約8%いる。
- ・問6の結果から「学校教育体験」が学校現場で役立っていないと感じている卒業生が約4%いる。
- ・問7の結果から「臨床・カウンセリング体験」が学校現場で役立っていないと感じている卒業生が約24%いる。

【有用性を示さなかった理由：回答者の一部を抜粋】

〔基礎体験について〕

- ・学校現場との関連を感じることができない。
- ・何をしたら覚えがないので、役に立ってないと思う。
- ・使わない。
- ・実際の現場は甘くない。
- ・良い経験にはなったが、現場は全く違った。

〔学校教育体験について〕

- ・ 実習はある程度参考になったが、大きく役立っているとは思えない。

〔臨床・カウンセリング体験について〕

- ・ 講義を受けている時から、「これがどういうことに使える」とか「どういう意味がある」ということがわからず印象に残っていない。
- ・ 自分自身が授業を受けるのはとても楽しかったが、現場に出て実践しようとすると思慮する点やポイントなどがよくわからず困った。とてもいい体験をさせてもらったので、現場で活かすためのポイントを自分自身がしっかりと残しておくと思った。
- ・ 今カウンセリングをする仕事に就いているからこそ、もう少し発達臨床心理や発達理論と結びつけて基礎を学ぶ形にしてほしいと感じた。

【まとめ】

有用性を示さなかった理由の記述が少なく一概には言えないが、学校を取り巻く環境は年々変化し、それに伴って学校での課題も多種多様である。そうした中で、三領域で学んだことが十分発揮できていないことも考えられる。三領域で体験したことや学んだことはどれも貴重であり今後活かされることを期待したい。

◆問5～問9の結果から、次のような特徴が挙げられる。

- ① 学校現場での有用性は三領域とも比較的高く、基礎体験については約90%、学校教育体験については約95%、臨床・カウンセリング体験については約73%の有用性を認めた。
- ② 学校現場のどのような場面で有用性を感じているのかについては、「子ども理解」「学校理解」「自己理解」「教科指導」が上位を占め、全体で占める割合からいうと「子ども理解」が約25%、「学校理解」「自己理解」「教科指導」がいずれも約11%となった。また、現在の学校現場では「地域との連携」「保護者理解」が重要であるが、学生のうちに地域住民や保護者との接点があることも、1000時間体験学修の特徴であり利点でもあると考える。
- ③ 記述式の所を見ると、三領域で学んだことが様々な場面で役立っていることがうかがえる。その一方で、有用性をあまり感じなかった卒業生の中には、体験した活動や大学で学んだ内容をはっきりと記憶していない卒業生もわずかながら見られた。また今後は、三領域での学びが学校現場のどのような場面で役立つのか具体的に指導していく必要があると感じる。



(2) 教育関係者以外

問10 1000時間体験学修は、現在のお仕事に役立っていますか。

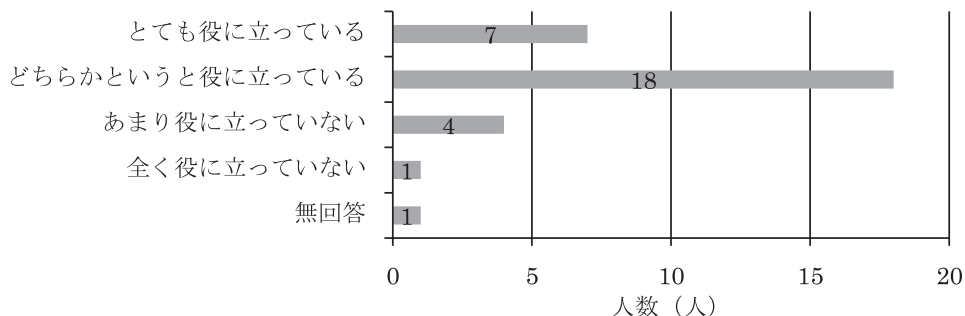


図9 1000時間体験学修の有用性

【結果】

- ・「役立っている」と感じている卒業生が約81%いる。

問11 1000時間体験学修は、お仕事のどのようなことで役立っていますか。具体的な内容がございましたらお書きください。

※問10で「とても役に立っている」「どちらかという役に立っている」にいずれかに回答があった方のみ対象

【有用性を示した具体的な内容】

- ・現在の仕事は地域の住民と直接顔を合わせて話をするものなので、1000時間体験学修で学校や地域など様々な場所に出かけていき、いろいろな人と出会えたことが活かされている。
- ・普通の大学だと同年代の方や決まった年代の方としか接する機会がないと思うが、1000時間体験学修で様々な年代の方とのコミュニケーション能力が身に付いた。
- ・自分対多数のお客様に対する関わり方において役立っている。
- ・医療現場にいるが、学校の様子が少しわかるのでどのように対応や支援をしてもらえばよいか考えやすい。
- ・現在会社で働いているが、お客様からのクレームや要望なども、聞くことの大切さを学んでいたおかげで大きなトラブルにもなりにくい。
- ・1000時間体験学修の思い出も失敗した思い出も現在の自分には全て必要な経験だと感じる。働くって少し孤独だし辛いことも多いけれど、あの時頑張れたから今も頑張れているように思う。ちょっとやそっとじゃくじけません。
- ・仕事の役職上、スタッフやアルバイトの方にフィードバックを行う場面が多々あるが、その

際、対象者への話し方や話の聞き方など、1000時間体験学修で学んだ接し方が役立っていると感じる。

- ・現在の仕事においても中学生や高校生とふれ合う機会が多いため、1000時間体験学修で多くの子どもたちとコミュニケーションをとってきたことが役立っていると感じる。また臨床・カウンセリング体験についても大人相手でも仕事に役立つことがあった。
- ・積極的に地域の方や関係者の方に関わっていくことができるようになったと思う。また自ら学び考えて動いてみる姿勢は、教員以外の仕事でもとても大切だと思うので役立っている。

【まとめ】

教育関係者と比較すると有用性を感じている割合はやや少ないが、約81%が有用性を感じている。活動において様々な人との出会いがあったことでコミュニケーションをとることの重要性を学んだ点が大きいかうかがえる。

問12 1000時間体験学修が、なぜお仕事であまり役立っていない、全く役立っていないとお考えですか。その理由をよろしければお書きください。

※問10で「あまり役立っていない」「全く役立っていない」と回答があった方のみ対象

【結果】

- ・問10の結果から、「役に立っていない」と感じている卒業生が約16%いる。

【有用性を示さなかった理由】

- ・病院に勤務しており、1000時間体験学修で関わってきた子どもたちとふれ合う機会が全くない。だが自分の役割を見つけたり、特性を知ることができたりしたので少しだけ役に立った。
- ・私は早い段階で一般企業への就職を考えていたため、1000時間体験学修に積極的に参加していなかった。卒業のための最低ラインしかしなかったため、幅広い経験（教職以外）をすることができなかったから。
- ・現場に出るとわからないことがたくさんあるし、一からやらなければならないことばかりだから。ただ、1000時間体験学修での出会いや思い出は強い味方になっている。

【まとめ】

有用性を示さなかった理由の記述は少なかったが、1000時間体験学修について否定的な考えではないことがうかがえる。教職以外の就職を考えている学生もいるので、そうした学生に対する支援が今後必要になってくると感じる。

◆問10～問12の結果から、次のような特徴が挙げられる。

- ① 教育関係以外でも、約81%の方が1000時間体験学修の有用性を認めている。
- ② 職種は様々だと考えられるが、記述の部分を見ると、地域の住民や子どもたち、または職場の同僚などとのコミュニケーションに1000時間体験学修が活かされていることがうかがえる。

3. 大学のうちに身に付けておくべき資質・能力について

卒業後、職に就くと戸惑うことが多々ある。その際に今後の自分の課題が明確になったり、学生時代に体験しておくべきだったものがあったことに気づいたりする。ここでは、学校現場をはじめ社会に出てから「大学在学中に身に付けておかなければならない資質や能力」(図10)について卒業生の経験を踏まえて調査した。

問13 大学在学中に特に身に付けておかなければならない資質や能力は何だとお考えですか。(複数選択 可)

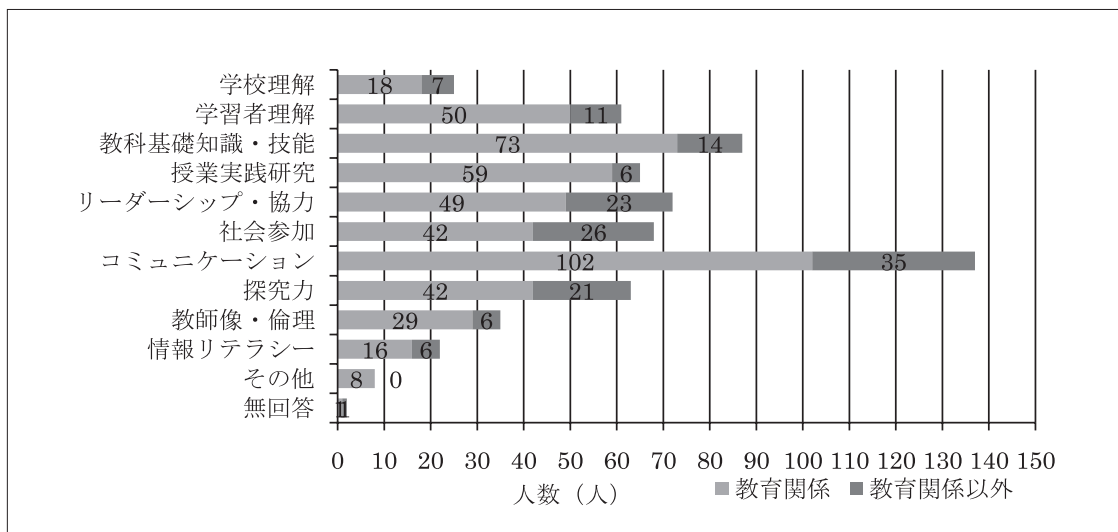


図10 大学在学中に身に付けておく資質・能力

【結果】

- ・「コミュニケーション」を挙げている卒業生が多く、教育関係・教員関係以外でもいずれも最も多い人数を示した。続いて「教科基礎知識・技能」「リーダーシップ・協力」の順となっている。

【まとめ】

学校現場に出れば子ども・保護者・教員・地域の方々とのコミュニケーションが当然必要となる。コミュニケーションがきちんととれることによって信頼関係が築けるとも言える。多くの卒業生がコミュニケーションを挙げていることから、大学在学中に基礎体験等でしっかりと身につけさせておく必要性を感じる。

問14 大学在学中に1000時間体験学修で、こんな勉強やこんな活動、あるいは、こんなことをもってしておけばよかったと思われることがございましたらお書きください。

【大学在学中にするべきこと】

- ・同じ活動に携わり続けたことはとても学びになったが、元から興味のない分野・苦手な分野

にはチャレンジしていなかった。いろいろな体験をしておけばよかったと思う。

- ・教師になるための授業を受けて、教育について研究してそのまま教育現場に出る人が大半だと思うので、地域の事業や街の科学館や博物館で体験学修を行う機会を増やすとよいと思う。
- ・幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校と学校への支援活動にばかり行っていたので、地域の活動や自分たちで企画する活動等を体験しておけばよかった。
- ・現在の学校では、特別支援教育が大変重要視されているように感じる。特別支援学校や特別支援学級以外でも支援を要する子どもが非常に多いので、特別支援教育専攻の学生に限らず、教員を目指す学生は誰もが特別支援教育への理解を深めておくべきだと思う。
- ・現場に出て、学級経営や教科指導で悩むことが多かったので、具体的な指導法についてもっと学んでおけばよかったと思う。
- ・学校に勤め始めてから「こんな体験をしておきたかった」という場面に出合うが、それはほぼ生徒対応である。生徒への個人対応を学生に任せる学校はないと思うので、設定できないと思う。同じ理由で即実践する力は育てにくいと思うが、基礎的な力はつくカリキュラムだと思う。それがねらいであれば十分だと思う。
- ・学習支援等で学年まんべんなく関わることができれば、現場に出てどの学年をもった時にも役立つと思った。他の先生の授業や生徒指導・学級経営など実際に働き始めると見る機会や時間がないので、見て「自分もこんな先生に」という目標のようなものが曖昧でもあると思う。
- ・実際に子どもと関わることをやっておけばよかった。自分が関わるだけではなく、教師と生徒の実際のやり取りを見られる活動に行けばよかったと思う。
- ・各教科の指導の仕方やねらいなど。大学在学中は、なんとなく学んでいても実際現場に立つと「こういうことだったのか」と思うことが多々ある。大学中に引き出しを増やすことが大切だと思った。
- ・集団の中の一人ではなく、自分一人に何かを任される体験をもっとしておきたかった。
- ・学習支援等の学校教育活動にはあまり参加してなかったと感じる。様々な学校の学級に支援員として入らせてもらい、いろいろな先生方の教え方や授業実践を学べばよかったと反省している。
- ・コミュニケーションのとり方や、悩んでいる子への対応など「心」に関わる活動をしておけばよかった。「教えること」よりも「寄り添って一緒に学ぶ」ことの方が大切だと働きだして思った。
- ・全体的に様々な活動に参加しておくべきだったと思う。学校側に親切にいろいろな場を提供していただいているのに、有効に活用できなかった。
- ・生徒の問題行動への対処を学べる体験。
- ・あまり仲間と協力しながら1つのことに取り組むといった活動に参加していなかったため、今いろいろな人たちと多くのことを計画する際に、そういうこともしておけばよかったと思った。
- ・私はあまりたくさんの方々の活動に参加する方ではなかったが、附属以外の子どもたちと関わることができたり、学童保育など学校以外の子どもの姿を見られたりしたことは新鮮だった。しかし、1000時間体験学修以外のアルバイト等の経験も社会に出て大変役立っていると思う。あまりにも1000時間体験学修に一生懸命なりすぎて、学校関係以外を知らずに社会に出ていくのも少し怖いと自分自身が社会人になり感じているところだ。
- ・魅力的な教師、尊敬できる教師と出会うために多くの学校に行くこと。
- ・子どもとの関わり方や保護者対応・学級経営に関することは、現場に出てみて初めて知るこ

とや対応してみないとできないことがたくさんあるように思う。しかし、教科の基礎知識や倫理は働きながら勉強するのは本当に難しいので、大学時代に得意教科だと言えるものを見つけ習得しておけばよかったと思う。

- ・働き始めて強く思うことは、多種多様な考え方や捉え方が学校現場で働くにあたって求められる。子ども・保護者・同僚も本当にいろいろな人がある。その中で生活するには、自分で幅を広げなくてはいけないと思う。だから臨床・カウンセリングをもっと学んでおけばよかったと思うことが多々ある。
- ・教育以外の仕事では、自分の能力をいかにアピールできるかを問われる場面が多くある。そうしたことを考えると、プレゼンテーション力やリーダーシップが学べる活動をもう少し行うべきだったと感じる。
- ・教育実習で部分実習だけではなく、1日実習や半日実習等、もっと実践できる場があればよかったと思う。また幼稚園での活動をもっと増やしたり、レクリエーション力をつけるような活動に参加したりできたらよかったと思う。
- ・不登校生徒や発達障がいなどの子どもを相手にして、支援する活動をもっとしておけばよかったと思う。学校現場でこうした子どもたちにとってどう支援したらよいかわからないことがあるので、学生時代に体験しておけばよかったと思う。



◆問13～問14の結果から、次のような特徴が挙げられる。

- ① 大学在学中に身に付けておかなければならない資質や能力として、教育関係者・教育関係者以外いずれも、コミュニケーション力が最も人数が多く全体の約21パーセントを占めている。
- ② 教科の基礎知識・技能も多いが、学校現場に出ると時間に追われて、教材研究をする時間がなく、学生の内にしっかりと教科の基礎を学んでおくべきだという意見もあった。
- ③ 学生の時に偏った活動にしか参加しなかった卒業生からは、幅広い活動をもっとしておくべきだったという声はいくつも聞かれた。

4. 後輩へのメッセージについて

ここでは、1000時間体験学修の学びや思い出、または後輩へのメッセージということで、自由に記述していただいた。1000時間体験学修に取り組む必要性や他大学でないこのプログラムの素晴らしさが綴られていた。

問15 1000時間体験学修の学びや思い出、または後輩へのメッセージ等がございましたらお書きください。

【大学在学中の思い出や後輩へのメッセージ】

- ・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等、様々な校種の体験活動をすることをお勧めする。理論を学び、体験を通して理想のあなたの教師像を作ってください。若手が増える現在、現場で必要なのはやはり「経験」だ。
- ・この1000時間体験学修があったからこそ、「できた体験」「出会えた方々」が一生の宝物にな

ると思う。最初の一步を踏み出すまでは勇気があるかもしれないが、踏み出してしまえば後はどうにかなる。そう信じて体当たりで挑んでほしい。

- ・体験について意味があるのかわからないのかは、自分の心がけ次第。何のためにしているのかを理解して学修してほしい。
- ・この体験学修でしか学べないことも多くあるので、しんどかったり面倒くさかったりすることもあると思うが乗り切ってほしい。若い力は重宝されるし、世の中もあり余るパワーを必要としている。
- ・教員になるために1000時間体験学修をするのではなく、全て自分を肥やしにすると考えてやってほしい。
- ・初めは面倒くさいと思ったが、行けば必ず何か得るものがあるのであってよかったと思う。
- ・1000時間体験学修の学校教育体験を通して、私は教員になりたいという思いを強く抱くことができた。この体験をすることができてとても良かったと思う。今でもふと学生の時のこの体験を思い出し、自分の目指す教師をイメージしている。この体験を糧として今後も頑張っていきたいと思う。
- ・社会人になって学校の教員がどれだけ一般の方とずれているのかといろいろ感じる。1000時間体験学修で子どもと関わることだけではなく、自分の知らない分野にどんどん参加してほしいと思う。それが子どもがどう成長していくのが良いのかと考えるきっかけにもなっている。
- ・大学時代の経験や学修内容は、正直、初任の半年に子どもと接する力になるだけだ。それ以降は研修で新しく知識を得ていく。でも、初任の右も左もわからない本当に忙しい時期に助けてくれるのは大学での学修だ。「面倒だ」「しんどそう」と思う体験にもどんどん参加してほしい。
- ・私は教員関係の仕事ではないが、活動によってどんな職業にも活かせることをたくさん学んだと思う。後輩へのメッセージとしては、他大学・他学部では経験できないこの機会を大切にしてほしい。
- ・体験学修で経験させていただいたことが、採用試験の時に自分の自信となった。大学ではたくさんの先生方にお世話になり、そのおかげで今の自分があると思う。ありがとうございます。島根大学で過ごしたことを励みに教員生活を送っているが、「辛いな」と思うこともあるけど、クラスの子もたちと一緒に過ごす楽しさはそれを勝る。
- ・在学中は大変だなと感じ、マイナスに捉えてしまったこともあったが、今思い出するのは1000時間体験学修で行った小学校のことばかりだ。教育実習よりも長く関わったからだと思うが、たとえ私のように教員にならなくても“先生”であった期間は大学時代の本当によい思い出となっている。
- ・活動で知らないところに行ったり、学校現場での体験活動にはあまり足は向かなかつたりしたが、失敗も経験。失敗しても許してもらえる今のうちにたくさん失敗して勉強してほしい。私は学校の先輩に「若い先生はできると思っていない。だけどそれが当たり前。いっぱい悩んで勉強しなさい。」と言われた。誠心誠意、一生懸命すれば失敗しても責められません。きっと支えてくださいます。頑張ってください。

- ・島根大学のカリキュラムは本当に充実している。卒業してますます思う。これをフルに活用して充実した学生生活を送ってほしい。
- ・子どもから「先生」と呼んでもらえる今がとても幸せだと感じる。もっと知りたい、学びたいと思っている子どもたちは、あなたたちを待っている。1000時間体験学修で出会った子どもにも3年ぶりに再会し、声をかけてくれるなど、そのつながりは学び以上に大切だと感じている。今しかできない出会いを楽しんでほしい。
- ・体験は重要だが、常に質的な体験を意識して取り組むことが重要だと考える。
- ・私は教育実習で素敵なクラス、先生に出会うまで一般企業に就職しようと思っていた。そこで学んだこと、感じた魅力が時を経ても私の教師としての原点になっている。
- ・同じ時間数活動しても同じ内容の体験活動に参加しても感じる学びは人それぞれである。だからこそ、たくさんの活動に参加し経験をすることも大切ではあるが、友達や仲間、先輩や関わってくださる様々な方々とたくさん語り共有することも大事だと思う。
- ・私は結果としては教職に就けなかったが、本当に教員になりたいという思いがあるなら、体験学修を楽しみながらも、自分の中で明確な目的（子ども理解に努めようとか、現場の先生の行動から学びとろうとか）をもって取り組むことが大切だと思う。
- ・どれだけ勉強ができて人も相手にする仕事に就くと、やはりコミュニケーション力は必要である。そしてどこに行っても一番大事なものは“人として”だと思う。1000時間体験学修で自分磨き（人間磨き）をしてほしい。
- ・3月まで大学生だった人が、4月からいきなり先生と呼ばれ、一人で学級経営をしていかなければならない。まずもってうまくいかない。でも1000時間体験学修で子どもとたくさん接していれば、子どもの心のつかみ方が少しでもわかり、4・5・6月まではなんとかなると思う。また、教員になれば楽しい思いや良い思いができる時ばかりでないの、今のうちに「子どもはかわいい」「教員になりたい」という気持ちを育ててほしい。
- ・逆境の中でもポジティブに乗り越えていける人、笑顔でいられる人はどんな仕事に就いても楽しさを見つけられると思う。仕事の種類ではなく、“あなたの考え方”が全てである。

IV 考察

1000時間体験学修の学びについて追跡調査アンケートを実施した結果大きな成果があったと言えるのではないかと考える。1000時間に及ぶ体験学修を卒業要件として必修化した教育課程であるが、三領域それぞれの学びが融合し合い、卒業生の現在の仕事の土台を築き上げたと言っても過言ではないと思う。

そうした中で成果と課題を挙げ、今後の1000時間体験学修の更なる充実を図っていきたい。

1. 成果

- ・基礎体験活動での学びについては、卒業生の約98%が学びがあったと感じている。教員を目指すうえで、学習支援等で学校現場を体験できたり、子どもたちと関わったりする場があることはとても大きいと考えられる。
- ・学校教育体験については、幼・小・中といった校種が異なる実習を行うことにより、子ども

たちの発達段階の特徴を見ることができる。また学習指導案を書く際に、きめ細やかな指導体制が整っているために、学校現場に出た際の教科指導にも大いに役立っている。

- ・臨床・カウンセリング体験は、子ども理解や人間関係づくり等、学級経営に直結するものが学べる場である。大学で学んだエンカウンターやロールプレイング等が学校現場で役立っていることがうかがえる。

2. 課題

- ・基礎体験活動については、現在の学生においても活動の種類が偏っていることが少なからずある。卒業生からのメッセージにもあったように、幅広い活動をするように指導していく必要があると考える。また学校現場では、児童生徒・保護者・地域住民などとコミュニケーションを当然とらなければならない。そのためには、幅の狭い活動のみに参加するのではなく、積極的に体験したことのない分野に参加をすることの必要性を感じる。
- ・学校現場では現在、不登校・いじめ・学級崩壊など様々な課題が山積している。現場に出た卒業生の中には生活・生徒指導や学級経営で苦慮しておられることがうかがえる記述もあった。現場に出ないとわからないことも多々あると思うが、学生のうちに学校での活動に参加した場合には、学習支援のみ行うのではなく学級経営について学ぶ場も必要になってくるのではないかと考える。
- ・1000時間体験学修の有用性をあまり感じていない卒業生もわずかながらいるのも現実である。この体験が、将来どのように役立つのか指導する際に明確にして学生に伝える必要がある。

V おわりに

1000時間体験学修がスタートして間もなく10年目が終わろうとしている。この節目の時期に追跡調査アンケートを実施した意味は大きく、卒業生からの実際の声を聞いたことは、とても貴重であった。この声を有効的に活用するために、改善できることは少しずつでも改善していきたい。

最後になりますが、追跡調査アンケートに協力していただいた卒業生の皆様に感謝申し上げます。今後の皆様のご活躍を期待しています。ありがとうございました。